秘密パーティ

●完全殺人の完全なトリック

佐野　洋

佐野　洋

秘密パーティ

新潮社版

秘密パーティ

著　者　佐野　洋
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社 新潮社
東京都新宿区矢来町71番地
電話東京（341）7111—9番
振替東京808番
印刷所　塚田印刷株式会社
製本所　憲専堂製本所
定　価　180円

1961年2月21日　印刷
1961年2月25日　発行

乱丁，落丁本は本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

© 1961 Printed in Japan

目次

第Ⅰ章　あるパーティ……五
第Ⅱ章　ある計画……四二
第Ⅲ章　ある手紙……五八
第Ⅳ章　ある学生……七七
第Ⅴ章　ある女……九七
第Ⅵ章　ある写真……一一六
第Ⅶ章　ある会議……一三四

第Ⅷ章　ある秘密……一五六
第Ⅸ章　ある計算……一七三
第Ⅹ章　ある関係……二〇二
第Ⅺ章　ある推理……二二三
第Ⅻ章　ある死亡届……二四四
第ⅩⅢ章　いつの日か……二六七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

秘密パーティ

＝完全殺人の完全なトリック＝

第Ⅰ章　あるパーティ

1

《何かしなければ……》

夕子は、たえずそう思っていた。二年前、高校卒業寸前に、故郷を飛び出し、この市の酒場に勤めるようになって以来、夕子はこの考えにとらわれ続けていた。どのような形で何をするか？　具体的には何も決めていないのだが、現在の状態に満足していなかったのだ。

だから結局、彼女が求めているのは、単に現状からの変化だけだったのかもしれない。毎日、夕方になると、安アパートを出て、何時間か酔客の相手をし、深夜再びアパートに帰る。このような無意味な日々に、倦きていたのだった。

そして、その彼女の欲望は、〈本名を呼ばれたい〉という形をとることもあった。店でつけ

てくれた夕子という名を、嫌ってはいないのだが、たまには親のつけてくれた名を振り回してみたいとも思うのだった。

例えば、ボックスに並んで腰をかけた男の手が、彼女の背を這い、暗い照明の下で、甘い言葉がささやかれたとしても、

「夕ちゃん、君は……」などと、いわば『偽の名前』で呼ばれると、職業意識がよみがえるようであった。

《店を変えれば、或いは気分が一新するかもしれない》と、考えたこともある。だが、それが自分の求める変化でないことは、彼女自身、はっきりと知っていた。店を変えたところで一カ月もすれば、結局、同じ心境になってしまうであろう……。

こうして、夕子は、漠然とではあるが、毎日、《何かしなければならない》《何か起きないか？》と思いながら、日を送っていたのだった。

そこへ持ちこまれたのが、勤め先『ソルボンヌ』のママ、芙美子からの話であった。

――その夜、芙美子は最後の客を送り出すと同時に、帰り支度をしていた夕子の肩に手を置いて言った。夕子は肩を露わにしたドレスを着ていた。芙美子の手は、しっとりとした温かみがあった。

「夕子ちゃん。ちょっと頼みがあるんだけれど……」
「なあに？」
「ううん。たいしたことではないんだけれどね。ちょっと残ってほしいの」
そして、夕子のほかに、さゆり、ひな子、香蘭の三人が残された。
芙美子は、四人を一番奥のボックスに集めた。バーテンの戸村や、他の女たちは、疑わしげな視線を投げかけながらも、挨拶をして帰って行った。
いつの間に注文したのか、芙美子は四人の前に、すしの盛り合わせを出した。そのマグロの色を、夕子は不思議に美しいと思った。それまで、感じていなかったのだが、急に空腹が意識された。
夕子は、すしに手を出しかかって、途中でやめた。芙美子に、このようなご馳走を出される覚えがなかったからだ。芙美子は、一体に吝嗇であった。貸しの取立てもやかましく、時には夕子たちでさえ、いやになることがある。たまに、帰りが一緒になっても、これまで、夜食をおごってくれたことはなかった。その芙美子が、自ら、すしをとり並べたのである。
やはり、警戒心が先に動いた。
「ママ、どうしたの？」
香蘭がはしゃいだ口調で聞いた。しかし香蘭の眼にも、警戒と好奇心とがうかがわれるよ

うだった。「ずいぶん、珍しいことがあるのね」
香蘭は、四人の中では、一番背が高く、支那服がよく似合った。本名は香代というのだが、店ではわざと中国人風の名をつけ、混血児だと称していた。
「お願いを聞いてもらおうと思って。さあ、みんな、遠慮なく食べてよ」
芙美子は、自分で湯を沸かし、お茶を入れてくれた。《いったい、どうしたのだろう?》夕子の警戒心は、さらに深まった。異例に異例が重なったのだ……。
「あのねえ、あさっての日曜、ここは休みなんだけれど、あんたたち、何かあてがある?」
芙美子は、低い丸椅子を運んで来て、それに腰かけると、遠慮がちに四人の顔を眺めまわした。
「ええ……。でも……」と、さゆりが聞き返した。彼女も、けげんな表情をしていた。
「そうね。みんな、それぞれ、いい人がいるんですものね。予定があるのは、当り前なんだけれど……」
芙美子は、自嘲するように、唇を曲げた。
「ママ、何ですの? はっきりおっしゃっていただけません?」と、夕子は切口上で言った。芙美子の煮え切らない態度に、いらだたしさを感じていたからでもあったが、『いい人』という話題から、早く離れたかったのである。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

夕子には、現在、恋人もそしてパトロンもいなかった。しかし、同僚たちの前では、『いい人』がいるような態度を装っていた。別に意味はないのだが、一種の虚栄なのかもしれない。だから、あまりその話題には、触れられたくないのだ……。

「じゃあ、言うわ。あ、でもみんな、おすしつまんでよ。別に、買収しようなんてつもりじゃあないのだから……」

その言葉に誘われ、最初にひな子が、すしの桶に手を伸ばした。夕子たちも、それに従った。

「あのねえ、日曜日の夜、あるところで、パーティがあるの。そのパーティを、あんたたち、手伝ってくれないかと思って……」

「あら、そんなこと……」と、夕子は言った。「ママが深刻ぶっているから、どんなに大変なことかと思ったんだけれど……」

宴会やパーティの接待係りに、バーの女性が呼ばれることは、それほど珍しくはない。主催者側とすれば、芸者を呼ぶより安くつくし、しかも芸者にはない新鮮な雰囲気が、喜ばれるのであった。

「じゃあ、夕子ちゃんは承知してくれるのね」

「ええ……。でも、それどんなパーティなの？」

「ほら、『弥生』って、料亭があるでしょう？　あそこなの。何でも、かなり偉い人たちが来るらしいんだけれど……」
「でもねえ」と、さゆりが口を挟んだ。「ママは、どうして、あたしたちを選んだんですか？」
「だって、あんたたちなら、間違いないと思ったのよ。彼氏がいないような子だと、宴会のあと、そのまま、そこに泊ってしまうかもしれないでしょう？　そんなとき、『ソルボンヌ』じゃ、女の子を世話したなんて、噂が立つと困るから……」
芙美子は笑いながら言った。しかし、そのとき、彼女の眼は落着きなく動いていた。夕子は、また、かすかな疑いを持った。
「でもねえ、ママ。そのパーティというの、あとで泊って行けなんて言うおそれがあるのかしら……」
「まさか……。何でも、八時ごろから始めて、十一時ごろまでには終るって言っていたから……。どう？　行ってくれない？　お礼は一人七千円ですって」
芙美子は金額に力をこめて言った。そして、その効果を確かめるように、四人の顔を眺め回した。
「七千円？　じゃあ、あたしも行くわ」と、香蘭が即座に言った。「ちょっと、パーティのお手伝いして、七千円なら、悪くないもの……。彼氏との約束なんか、どうにでもなるわ」

《香蘭らしい》と、夕子は思った。店では、香蘭は若い方だったが、最も現実的な考え方を持っていた。二十三歳までに、百万円貯める方針だと言っていた。金回りのよい男だけを、彼女は相手にしていた——。

「でも……」

夕子は、七千円と聞いてから、却って怖気づいた。「どうして、そんなにくれるのかしら？変だわ」

八時から十一時まで、たった三時間のサービス料としては、不当に高いように思った。その主催者は、恐らく、その上に、芙美子へも、いくらかの礼をするつもりなのだろう。ことによると、一人当り、一万円というのを、芙美子が頭はねしているのかもしれない。《それだけの金額を出すのなら、芸者を呼んだ方が……》

「そうなのよ」

芙美子は、夕子に同調するように、眉をひそめた。「あたしも、ちょっとおかしいと思って、その点をたしかめてみたんだけれど、決して、変な要求はしないというの」

「いいじゃないの」

香蘭が、すしをほうばりながら、持前のはしゃいだ声を上げた。「まさか、殺すとは言わないでしょうよ。七千円なら、たいていのこと、がまんするわ。でも、泊れって言ったら、割

増金とってやる……」
香蘭の言葉に、他の四人は笑った。香蘭の乾いた口調は、いやらしいという感じを与えないのだ。
「それもそうね」と、さゆりも合槌を打った。「一人で行くのではいやだけれど、四人一緒なら、何ていうこともないし……」
「ええ」
ひな子もうなずいた。
「じゃあ、みんな聞いてくれるわね」
芙美子は立ち上った。そして、カウンターの中にはいり、手提金庫を探っていたが、やがて、封筒を持って戻って来た。
それを見て、夕子も心を決めた。《何かが起きたって、かまわないじゃないか?》常々、彼女は何かが起きることを待っていたはずである。案外、これが求める変化なのかもしれない。
「これ、お礼の前渡しですって……」
ひとりひとりに、茶色の封筒が配られた。香蘭が中を調べ、
「イー、アル、サン……」と、数え始めた。その数え方は彼女の『登録商標』のようなものだった。

「たしかに、七枚あるわ。ちょっとしたボーナスね」
香蘭は、それをおしいただく真似をした。
《レイン・コートが買える》と、夕子は思った。ベルトで、ウエストを締める型のレイン・コートが、彼女は以前から欲しかったのだ。

2

日曜日、夕子たちは、誘い合って、『弥生』に行った。
『弥生』の玄関には、
「本日、都合により、休業させていただきます」と、貼り紙がしてあったが、格子戸には、鍵がかかっていなかった。
案内を乞うと、紫色の着物を着た女が出て来た。臙脂の帯が、よく似合った。年は三十五、六で、上品な雰囲気を身につけていた。『ソルボンヌ』のママにくらべ、かなりやせた方であった。
「あのう……。ソルボンヌから」
ひな子が代表して言うと、相手は、とたんに歓迎の表情を作った。

「あ、ごくろうさま。さあ、どうぞあがってちょうだい……」

その口調から察して、彼女が『弥生』の女主人らしかった。《この若さで、これだけの料亭を……》と考えながら、夕子は女主人のあとに従い、よく磨かれた廊下を歩いた。

二階の六畳間が、夕子たちの更衣室として与えられた。部屋の隅に、豆火鉢が置かれ、やかんがかかっていた。茶道具も、すぐそばにあった。セルフ・サービスをしろということらしかった。

夕子たちは、そこで着換えをすました。夕子は肩をあらわにした真赤なカクテルドレスを着た。さゆりはグリーンで、ひな子はピンクであった。香蘭だけはいつものように支那服を持参していた。しかも、香蘭の支那服は、彼女の持っているものの中でも、腿の横の切り込みが、最も深い、煽情的な型であった。

「七千円分のサービスだもの……」

香蘭は、それを着ながら、じょうだんを言った。

八時まで、約二十分あった。その間、夕子は何となく落着かなかった。

自分が変化を求めようとしているのは事実であったし、変化を受け入れるだけの心構えはできているつもりだったが、やはり不安はあった。《ことによると、今夜が人生の岐路になるのではないか?》という気さえしたのだ。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com